慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国語教育における「反義語」を用いた語彙指導について
Sub Title	Vocabulary guidance in Chinese education using "antonyms"
Author	浅野, 雅樹(Asano, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.12, (2015.) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	For studying and teaching Chinese vocabulary, "pinyin (characters that express Chinese phonetics) - transcription" is generally recognized and deployed as the core expression for vocabulary information. However, vocabulary also contains all sorts of other vocabulary information. As one element that falls under the category of word meaning, there exists "word meaning networks" such as synonyms and antonyms, polysemic words, related words, and hypernyms and hyponyms. Concerning the goal for the learner to learn and acquire vocabulary more effectively, taking in and using knowledge pertaining to this kind of word meaning aspect is obviously a major issue for teaching. This paper specifically handles "antonyms" from among these networks. First, the current situation is clarified for just how "antonyms" are made use of in things like the textbooks and dictionaries that the learner uses. Specifically, surveying which words are selected as antonyms for each other reveals numerous dissimilarities between different dictionaries, particularly in the case of disyllabic words. However, in the educational arena, the necessity arises to set forth a pairing of antonyms that is uniform to a certain extent. Including issues concerning this kind of selection of antonyms, this paper considers the significance and usefulness of incorporating "antonyms" in the teaching of Chinese vocabulary that targets Chinese learners, with the main focus on Japanese speakers.
Notes	研究論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20150000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国語教育における
「反義語」を用いた語彙指導について

浅　野　雅　樹

Abstract

For studying and teaching Chinese vocabulary, “pinyin (characters that express Chinese phonetics) – transcription” is generally recognized and deployed as the core expression for vocabulary information.

However, vocabulary also contains all sorts of other vocabulary information. As one element that falls under the category of word meaning, there exists “word meaning networks” such as synonyms and antonyms, polysemic words, related words, and hypernyms and hyponyms. Concerning the goal for the learner to learn and acquire vocabulary more effectively, taking in and using knowledge pertaining to this kind of word meaning aspect is obviously a major issue for teaching.

This paper specifically handles “antonyms” from among these networks. First, the current situation is clarified for just how “antonyms” are made use of in things like the textbooks and dictionaries that the learner uses. Specifically, surveying which words are selected as antonyms for each other reveals numerous dissimilarities between different dictionaries, particularly in the case of disyllabic words. However, in the educational arena, the necessity arises to set forth a pairing of antonyms that is uniform to a certain extent. Including issues concerning this kind of selection of antonyms, this paper considers the significance and usefulness of incorporating “antonyms” in the teaching of Chinese vocabulary that targets Chinese learners, with the main focus on Japanese speakers.

１．はじめに

中国語の語彙に関する学習と指導においては、一般的に「ピンイン[1)]－訳語」という語彙情報が中心的な存在として見なされ、展開されていると言える。このことは、主に大学等で使用される教材において、語彙面での内容が、テキスト本文の語注の役割を果たす「ピンイン－訳

語」に限定されるのが一般的である状況によりうかがえる。また語彙学習や語彙指導を全体的に見ると、どのような語を、どれだけ学習するのか（覚えるのか）という、所謂「語彙の広さ」に対して注目が集まっている。一方で、一つの語に対する様々な語彙情報において、重要なものは何かという、所謂「語彙の深さ[2)]」の面に対しての関心は薄いと言える。

「語彙の深さ」の面における、語義の範疇に属する要素の一つに、類義語や反義語、多義語、関連語、上下位語などの「語義のネットワーク」がある。学習者がより効果的な語彙学習や語彙習得をするという目的に対して、このような語義の面での知識を取り入れ、それらを活用することは、言うまでもなく指導上の重要な課題の一つであろう。また、これらの知識や理解が語彙学習ストラテジーの多様化や充実化といった学習者の自律性を高め、さらに学習者の認知面での語彙習得に関する活性化につながるといったこともよく指摘される[3)]。

本稿では、その中の「反義語」[4)]について取り上げる。まず、学習者が使用するテキストや辞書等で、反義語がどのように活用されているのかという現況を明らかにする。具体的に、どの語とどの語が反義語として選定されているのかということを調べると、“热”と“冷”、“买”と“卖”など単音節語においてはおおむね限定的である状況がうかがえる。一方、二音節語となると、各辞書によってかなりの異同が見受けられる。しかし、とりわけ教育の場では、ある程度の一律的な反義語の組み合わせを定める必要性が生ずる。このような反義語の選定に関する課題も含めて、本稿では主に日本語話者の中国語学習者を対象とした語彙指導において、「反義語」を取り入れることの意義と有用性についての考察を行なう。その上で、実際、教育や学習の場で使用されるテキストや辞書に、具体的にどのような「反義語」を導入し、提示すべきなのかといった課題についても言及をしたい。

2．現代中国語における「反義語」とは

「反義語」を用いた語彙指導や学習を論ずる前に、現代中国語における反義語の概要について述べる。反義語については、これまで「反義語の定義と分類」、「反義語と対義語の関係」、「反義語と類義語の関係」などの観点から、数多くの論考がなされている[5)]。

刘叔新、周荐（2000）では、“反义词”と“对比词”「対義語」は区別すべきであることが述べられ、以下に示すように、語レベルでの反義関係が成立するための四つの条件を定めている。

1 意义上互为存在的前提。
2 不同词语的理性意义只在某个方面上相反，其他方面须彼此一致。
3 不同的词语单位，相互间若要建立起反义关系，它们就必须能共同出现在某种风格、某种语体之中。

4 词与词之间要确立反义关系，两词的词性必须相同；如果固定语进入反义组，其语法功能也必须同语义相反的单位（词或固定语）一致，如都相当于动词的作用或形容词的作用、名词的作用等。

［1 意味の上で相補関係にあることが前提となる。

2 異なる語句の概念義がただある面においてのみ反対の関係であり、その他の面では互いに一致性がなければならない。

3 語句の単位が異なる場合、お互いに反義関係が成立するには、それらは共通の文体や文のスタイルにおいて用いることができなければならない。

4 語と語の反義関係が成り立つには、二語の品詞が同一であることが必要である。もし固定フレーズを一組の反義語に取り入れるのであれば、その文法機能は、例えば、動詞或いは形容詞、名詞の役割に相当するなどといったように、語義が反対となる単位（語或いは固定フレーズ）と一致しなければならない。］[6)]

（刘叔新・周荐 2000：97～108）

また、一般的に“现代汉语”と称される中国の大学生が使用する現代中国語学の概説書には、その「語彙論」の章に「反義語」の項目が見られるのが普通である。张宜生（2013：205-206）では、反義語を「绝对反义词［絶対反義語］」、「相对反义词［相対反義語］」、「依存反义词［依存反義語］」、「对称反义词［対称反義語］」という四つに分類されている。

また、国際漢語教育における反義語の問題に関する先行研究としては、類義語に関するものほど多くはないものの、以下で述べるようないくつかの研究が見られる。孟凯（2009）では、“发短信”から“＊发长信[7)]”、“高级汉语”から“＊低级汉语”といった留学生の反義語に関する「過度の類推」について、その原因と類型について考察がなされている。「過度の類推」を語義によるもの、品詞によるもの、コロケーションによるものの三つに分け、これらは教育上注視すべき課題であることが提起されている。袁嘉（2004）では、「非対称性」という概念から反義語に関する様々な問題が挙げられている。例えば、“甜↔苦”から“甜头↔苦头”が成り立つのに対して、“甜食↔苦食”は成り立たない（“苦食”はない）。また、“大灶↔小灶”という反義語については前者がその本義と派生義で使用されるが、後者は本義では使用されず、その派生義と比喩義で使用される非対称性が指摘されている。その他、张博（2007）では、反義語を構成する形態素の意味関係に基づく類推からの誤用や反義関係の不均衡性などの観点から、国際漢語教育における反義語の問題点が指摘されている。

ただ、日本語話者の学習者を対象とした反義語指導や学習上の問題点、また教育の場に「反義語」をどのように導入するのかといった実質的な問題についての考察は少ない。

3． テキストにおける「反義語」に関する調査

教育面での反義語についての現状をより明確にするため、筆者はこの度、日本で出版されているおおよそ中級レベルの中国語テキスト及び国際漢語教育用のテキスト[8)]における反義語の使用状況を調査した。本章では、以下これらの調査結果を示す。

3.1 日本で出版されているテキストに対する調査

日本の主に大学で使用されているテキストで、おおよそ２年生の授業で使用される初中級から中級レベルの30部を対象として、調査を行った。「反義語」を一定の提示方法によって体系的に取り入れているテキストは見当たらなかった。また、語彙論の体系知識として、「反義語とは何か」といった事項を明示的な学習事項として取り上げるテキストもなかった。一部のテキストに関しては、各課の本文に対する「語注（語釈）」の箇所に、一組の反義語となる二つの語をセットで示す例が見られた。例えば、洪潔清、劉郷英（2004：8）では、“上课－下课、开始－结束、借书－还书、便宜－贵、容易－难”といった反義語が記されている。このような反義語を付しているテキストは調査した30部のうち４部だけであり、全体的に見て、「反義語」が何らかの形で取り入れられる比率は低い状況が明らかになった。

3.2 中国で出版されているテキストに対する調査

主に中国で出版されている国際漢語教育用のテキストを対象に調査を行った。前述した日本で使用されているテキストと同様に、テキスト本文の語注の中に、反義語を付すテキストがいくつか見られた。さらに一部のテキストでは、以下に示すように、「反義語」が語彙論における学習項目として明示されているものや、各課の“习题”「練習問題」において、ある語の反義語を問うような問題が使用されていた。

朱子仪（2008）は15課から構成されるテキストであるが、それらの課のほとんどの「練習問題」の箇所に、以下に示すような問題が付されている。

一、从课文中找出下列词语的近义词和反义词 ［本文から下記の語の類義語と反義語を探しなさい。］

１．近义词		２．反义词	
如今 __	爱护 __	获得 __	异常 __
孤单 __	高尚 __	凶恶 __	自卑 __
得到 __	再次 __	寒冷 __	自私 __

（朱子仪主编 2008：78）

阮咏梅（2012）では、文章の読解に対して、前後の文脈からその文章で使用されている語の語義を推測する方法について、５つの事項が記されている。その中の一つが、下記に示すような「反義語」や「対義関係」に関する内容である。

１．以反义词和对比关系为线索猜测词义

有时作者运用对比的手法来表现事物之间的差异。在进行对比的过程中，作者必然会用一些互为对应、互为反义的词语，使不同事物的特点更为突出，通过上下文的逻辑关系，从对两种事物或现象进行对比的描述中，读者可以根据其中一个熟悉的词推断出另一个生词的词义来。另外，在表示这种对比关系时，作者通常会用一些信号词来表明另一个词语与前面的词语互为反义，这些信号词无疑为读者理解和猜测生词词义提供了非常好的线索。

［１．反義語と対比関係により語義の類推をする

作者は対比の手法を用いて事物の間の差異を表現することがある。対比の過程で、作者はいくつかの互いに対義関係或いは反義関係にある語句を用いて、異なる事物の特徴を際立たせるが、前後の文脈の論理関係を通して、二種類の事物や現象に対する対比の記述から、読者はその中の一つの既習の語により、もう一つの方の語の語義を推測することができる。そのほか、このような対比関係を表現するとき、作者は通常、あるシグナルとなる語を用いて、もう一方の語が前に出てきた語と反義であることを示すが、これらのシグナルとなる語は、読者に対して知らない語の語義を理解し推測するための手がかりとなることは明らかである。］

（阮咏梅 2012：102）

中国で出版され使用されている国際漢語教育用のテキストの中には、上で示したような、「反義語」に関する事項を提示するものがある。ただ、全体的に見ると、語彙論体系知識[9]としての「語構成」や「類義語」、「接辞」、「単語と形態素の関係」、「成語などの特殊語彙」などと比較すると、「反義語」に関しての事項を示すテキストは少ないことがかわる[10]。

４．反義語辞典において提示される「反義語」に対する調査と考察

４.１　反義語辞典に対する調査結果

現代中国語において、どのような反義語が存在しているのかという点に関しては、辞書類から最も詳細な情報が得られる。数の上では“同义词词典”「類義語辞典」より多くはないが、中国の中国語教育界では、すでに相当数の“反义词词典”「反義語辞典」が出版されている状況が見受けられる。この度、その中からいくつかの辞典を調査対象としたが、以下で２部の反

義語辞典（《新华反义词词典》、以下略称《新》及び《反义词应用词典》、以下略称《应》）と1部の学習辞書（《汉语教与学词典》、以下略称《教》）については、その調査結果を示す[11)]。

（表１）反義語の組数（見出し語数）

《新》	807
《应》	1047
《教》[12)]	257

（表２）反義語とされる語の音節数[13)]

	1↔1	1↔2	2↔2	3↔3	4↔4（成語）
《新》	0	0	671	1	135
《应》	34	5	665	4	339
《教》	158	4	94	1	0

反義語辞典の見出し語となっている語の音節数を見ると、「二音節語↔二音節語」のパターンが圧倒的に多いことがわかる。一方、学習辞書における反義語の提示については、上の《教》の例からわかるように、「単音節語↔単音節語」のパターンがかなりの割合を占めている。また、《应》のように一部の反義語辞典では、「成語」がかなり収録されている。

（表３）一組の反義語の語数

	1↔1	1↔2	1↔3
《新》	725	79	3
《应》	984	63	0
《教》	237	19	1

反義語辞典では、見出し語となる一組の反義語は「１語↔１語」の場合が大多数である。ただ、一部に“消费⇔[14)]生产、积累”《新》や“失败⇔胜利、成功”《应》のように「１語↔２語」の形で提示されているものもある。さらに“具体⇔抽象、笼统、概括”《新》のように「１語↔３語」の形で提示されている例も一部見受けられる。また、他の反義語辞典を調べると下に示すように「複数語↔複数語」や「１語↔複数語」の形を一組の反義語とする辞典も見られる。

（以下で示す《上》は《现代汉语反义词典》、《中》は《新华反义词词典（中型本）》、《现》は《现代汉语反义词词典》の略称である。）

“保护⇔破坏、伤害、损害、损坏”《上》
“大概、也许⇔必定、肯定、一定”《中》
“清静⇔喧闹、喧嚣、吵闹、嘈杂”《上》
“播发、播放、播映⇔收看、收视”《中》
“完整、完好⇔残破、残缺、破烂、破碎、破损”《中》

（表４）反義語とされる語の品詞[15)]

	動詞	名詞	形容詞	副詞	代名詞	数量詞	接続詞
《新》	316	118	324	8	1	0	0
《应》	288	63	355	7	0	1	1
《教》	61	77	116	1	2	0	0

品詞に関して調べると、全体的に形容詞と動詞が多く、その次に名詞が多い。虚詞[16)]については、ほとんど挙げられていないが、この点は、同じ語義の範疇における類義語に関する「類義語辞典」の場合と大きく異なる。

４.２　反義語辞典において提示される反義語に対する考察

４.２.１　反義語辞典間の見出し語の異同について

どの語とどの語が反義語として見なされているのかという問題に対して、いくつかの反義語辞典を調べてみると、決して均一的ではないことがうかがえる。この点については単音節語の反義語である“大”と“小”、“热”と“冷”などに比べて、特に二音節語において顕著である。

例えば、“绝对”は、調査したすべての辞典において“相对”が反義語とされていたが、その他の語を反義語としている辞典は見当たらなかった。一方で、“陈旧”という語について調べると、《新》では“新颖”、《应》は“崭新”、《现》では“新鲜”というように各辞典によって、反義語とされる語が異なる。さらに“奢侈”という語に対しても、以下の（表５）から分かるように若干の相違が見受けられた。

（表５）各辞典において“奢侈”と反義語とされる語

《新》	简朴　朴素
《应》	俭朴
《现》	朴素
《上》	俭朴　朴素　勤俭　俭省
《中》	なし[17]

さらに、より広い意味領域で、その意味に相当する反義語の調査を行なった。「得る」と「失う」及び「暑い」と「寒い」という意味においては、以下（表６）と（表７）に示すように、各辞書によって様々な反義語が見出し語とされている。

（表６）「得る⇔失う」

《新》	“获得⇔丢失”、“得到⇔失掉”
《应》	“获得⇔丧失”、“博得⇔丧失”
《现》	“得到⇔失失”、“得⇔失”
《上》	“获得⇔失去、失却”
《中》	“得⇔失”“获得、得到、取得⇔失掉、失去”

（表７）「暑い⇔寒い」

《新》	“酷热⇔严寒”“闷热⇔凉爽”“火热⇔冰冷”“温暖⇔寒冷”
《应》	“热⇔冷”“滚热⇔冰冷”“酷热⇔严寒”“炎热⇔寒冷”“闷热⇔凉爽”
《现》	“热⇔冷”“炽热⇔冰冷”“滚烫⇔冰凉”“炎热⇔寒冷”“火热⇔冷酷”“酷热⇔严寒”
《上》[18]	“热⇔寒、冷、凉”“冷⇔暖、热”“炎热⇔寒冷”“冰冷⇔火热、滚热” “严寒⇔酷热、炎热”“闷热⇔凉快、凉爽”“冷飕飕⇔火辣辣、热腾腾” “热烘烘⇔冷冰冰”
《中》	“热⇔冷”、“炎热、火热⇔冰冷、寒冷”

４.２.２　反義語とされる語の難易度

反義語辞典に見出し語として収録されている語のレベルを、１～６級に分けた新 HSK の5000語[19]を基準とし、調査をした。その結果、同じレベルにある二語が一組の反義語とされ

る、以下のような例が比較的多い状況がうかがえた。（以下に示す例のカッコ内の数字は新HSK 語彙基準の級を示す。）

冷⇔热　(1)《应》　　放弃⇔坚持　(4)《新》
快⇔慢　(2)《应》　　分析⇔综合　(5)《新》
东⇔西　(3)《教》　　反抗⇔屈服　(6)《应》

ただ、一方で３級分以上の差がある語が一組の反義語とされている例や、３級の語と級外の語が一組の反義語とされる、以下のような例も見られた。（(外）は基準外の語を示す。）

高兴(1)⇔痛苦(5)《应》　　帮助(2)⇔欺负(6)《新》
聪明(3)⇔愚蠢(6)《新》　　小心(3)⇔大意(6)《新》
安静(3)⇔烦躁(外)《应》　　参加(3)⇔退出(外)《应》
非常(2)⇔平常(5)《新》　　热情(3)⇔冷淡(6)、冷漠(外)《新》

4.2.3　形態素の共通性と相違について

二音節語以上の反義語とされる語の構成要素である形態素について整理すると、以下のような関係性が認められる。

①　同じ形態素から成る一組の反義語

「AB－AC（一音節目が共通)」、或いは「BA－CA（二音節目が共通)」に関しては、異なる方の形態素であるＢとＣが「反義性を具える」場合と「反義性が認められにくい」場合がある。

(a)
罕见⇔常见《应》　　噩梦⇔美梦《应》
丰收⇔歉收《新》　　进步⇔退步《新》
(b)
可爱⇔可恨《新》　　年轻⇔年迈《新》
交好⇔交恶《中》　　老媪⇔老翁《中》
(c)
创见⇔成见《应》　　重要⇔次要《新》
敬礼⇔还礼《中》　　开心⇔伤心《现》
自卑⇔自负《应》

上記の（a）で示す反義語は、“罕见⇔常见”のように、二音節目が共通の形態素であるが、一音節目の形態素に反義性が具わるタイプである。（b）で示す反義語は“可爱⇔可恨”のように、一音節目が共通の形態素であるが、二音節目の形態素に反義性が具わるタイプである。数の上では（a）タイプの方が（b）タイプより圧倒的に多い。上に示した（c）のタイプは、異なる方の形態素の意味は反義性が希薄な反義語の例である。例えば“创见”と“成见”における形態素としての“创”と“成”には、上で示した（a）や（b）のタイプに比べて、「反義性」が認められにくいと言える。

② 二音節語の語構成において、同じ形態素を持たない

同じ形態素を持たない反義語（AB－CD）については、以下のようなパターンがある。

（a）

好转⇔恶化《应》	淡雅⇔浓艳《现》
无心⇔有意《新》	笑脸⇔愁容《新》
猛跌⇔暴涨《应》	加快⇔放慢《新》
隆冬⇔盛夏《新》	飞扬⇔飘落《应》

上に示す（a）の反義語は、一方の形態素には反義性があり、もう一方の形態素には類義性があるタイプである。例えば、“好转”と“恶化”における、“好”と“恶”には反義性が認められるが、もう一つの形態素である“转”と“化”には類義性が認められる。このように“笑脸”と“愁容”までの四つの例は、A と C に反義性が認められ、B と D に類義性が認められるタイプである。また“猛跌”と“暴涨”から、最後の“飞扬”と“飘落”までの四つの反義語は、反対に A と C に類義性が認められ、B と D に反義性が認められるタイプである。

（b）

前进⇔后退《新》	寂静⇔喧闹《应》
肥胖⇔干瘦《中》	建设⇔破坏《新》
放松⇔抓紧《应》	打倒⇔建立《应》
分散⇔汇集《新》	内心⇔外貌《新》

上に示した（b）の反義語は、A と C に反義性が認められ、B と D にも反義性が認められるというように、二つの形態素とも、それぞれに反義性があるタイプである。例えば、“前进”と“后退”における、“前”と“后”には反義性が認められるが、もう一つの形態素である“进”と“退”にも反義性が認められる。

（c）

高兴⇔生气《新》　　马虎⇔认真《应》
坚信⇔担心《应》　　洗尘⇔饯行《现》
体面⇔丢脸《新》

上に示した（c）の反義語は、語のレベルで反義性が具わるが、形態素のレベルでは反義性が認められない。例えば“高兴”と“生气”については、形態素である“高”と“兴”、“生”と“气”の間に反義性は認められにくい。全体的にこのタイプに属する反義語は少ない。“马虎”や“洗尘”、“丢脸”などのように主に派生義や比喩義で使用されるものが多い。

4.2.4　品詞の表記について

反義語とされる語の品詞について、辞典で示される例では、品詞が同一のものが圧倒的多数である。ただ、中には以下のように、異なる品詞の語が一組の反義語とされる例も見受けられる[20)]。

博识（动）⇔浅薄（形）《应》　　满额（动）⇔空额（名）《中》
发端（动）⇔结局（名）《中》　　相当（动）⇔悬殊（形）《应》
不宜（动）⇔适宜（形）《应》　　突然（形）⇔渐渐（副）、逐渐（副）《中》
点滴（形）⇔许多（数量）《应》

“博识（动）⇔浅薄（形）”のように一組の反義語に対して、一方の語が「動詞」、もう一方の語が「形容詞」とされる例が最も多かった。また、“突然（形）⇔渐渐（副）、逐渐（副）”のように実詞と虚詞がセットで反義語とされている例も見られた。

4.2.5　反義語辞典に示される語彙情報について

①　釈義（語義の記述）

反義語辞典は、反義関係が認められる複数の語を一組にして、見出し語が定められる。語の釈義については、以下に示すように語義に関する反義性が理解されやすいよう記されることが多い。

优秀：突出，出众，超过一般
平常：普通，不突出　　《新》

优秀：（学问、品质、成绩等）非常好或超出一般
平常：普通；一般；没有特殊之处　　《教》

“优秀⇔平常”は反義語辞典における釈義（語義記述）では、上で示すように“突出−不突出”のような、反義性を強調した形で示される例が多く見受けられる。その下の例は一般学習辞書における“优秀”と“平常”の記述であるが、これと比較すると反義語辞典では、一般辞書における例がそのまま使用されているわけではないことがわかる。反義語辞典において見出し語とされる一組の反義語に対しては、このように反義性が明確にされる形で、対立する語義が示される。

一方で、下記の例のように共通面をあえて示した上で、その範疇や意味領域内での反義性を使用者に認識させるという形式を用いる反義語辞典がいくつか見られる。

“晦涩⇔明快”　多用在语言文字等的表达理解方面。《新》
［言語や文字などの表現に対する理解という面で多用される。］
“感激⇔埋怨”　都表示因某事而产生强烈的心理感受。《现》
［ともにある事により生ずる強烈な感情を示す。］
“赞赏⇔贬斥”　多用在对人和事物的评价方面。《新》
［人や事物に対する評価の面で多用される。］

反義語の共通面で挙げられる語義に関する範疇や意味領域については、上に示す「言語」「心理」「評価」の他、「数量」「時間」「程度」「生活」「態度」「思想」などが示されることが多い。

また、反義語辞典では上述した語義のほか、語彙レベルにおける文法面、意味面、語用面での、語の「付属義[21)]」を表記しているものが見受けられる。

“恐怖⇔安宁”：［恐怖］形容词。由于生命受到威胁而引起的害怕心理。
多用于书面语。［安宁］形容词。秩序正常，没有骚扰；（心情）安定、宁静。可受程度副词修饰。《应》
［“恐怖”形容詞。生命が脅威にさらされたことにより生ずる恐怖感を示す。書面語として多用される。“安宁”形容詞。秩序立っていて、騒ぎがないこと。気持ちが安定し、落ち着いていること。程度副詞の修飾を受けることができる。］
“存在⇔消逝”：［说明］“存在”可以带宾语，“消逝”不能带宾语。《现》
［“存在”は目的語を取ることができる、“消逝”は目的語を取れない。］

“奸诈⇔忠诚”：［奸诈］虚伪诡诈。不讲信义。贬义。［忠诚］（对国家、人民、事业、领导、朋友等）尽心尽力。有动词用法。褒义。《应》
［“奸诈”誠意がなくずる賢いこと。信義を軽視すること。貶義。“忠诚”（国家、人民、事業、指導者、友人に対して）誠意を尽くすこと。動詞の用法を持つ。褒義。］

“并重⇔偏废”：“并重”常用于肯定句，“偏废”多用于否定句。《现》
［“并重”は肯定文によく用いられ、“偏废”は否定文で多用される。］

文法面では、最初の“恐怖⇔安宁”の例のように程度副詞の修飾を受けられるという点や、二つ目の“存在⇔消逝”のように賓語を伴うことができるかどうかという点、また三つ目の“奸诈⇔忠诚”に見られる品詞についての表記が見られる。意味面については、三つ目の“奸诈⇔忠诚”のように、「褒貶義」についての記載が多く見られる。その他、「比喩義」で使用されるかどうか、結びつく賓語が「具体性」と「抽象性」のどちらかといった点が記されることが多い。語用面については、一つ目の“恐怖⇔安宁”における“多用于书面语。”のように「書面語−口語」についての特徴、また最後の例“并重⇔偏废”に示される「肯定文−否定文」のどちらで多用されるのかといった点が示される。さらに「公式の場で使用される」などの使用場面に関する表記も見られる。

② 用例

用例については、一般辞書の形式と同様に、一組の反義語についてそれぞれの見出し語を含んだ複数の用例文が示されるのが一般的である。また、一組の反義語に対して、以下で示すように、二つの語がともに含まれる文を提示する《应》のような反義語辞典も見られた[22)]。

寂静⇔喧闹［应用例句］熄灯以后，喧闹的校园寂静得像一座空城。《应》
体面⇔丢脸［应用例句］合法经营不发财也体面，违法经营发了财也丢脸。《应》

③ 補足的に示される反義語の表記について

反義語辞典では、ある語に対して最も反義性が強いと見なされる語が一組の反義語とされ見出し語となる。しかし、4.2.1 でも述べたように、実際はある一つの語に対して、一つの語を反義語として限定できるという状況は稀である。［A ⇔ B］という反義語を示す一方、語 A はさらに語 C、語 D と、語 B は語 E、語 F、語 G とも反義関係があり、反義語と見なせるという場合が比較的多い。この点について、反義語辞典では、以下で示すように、一般的に「補足」として、さらに反義性を具える複数の語が示される。

“忘记⇔惦记”：“忘记”的反义词另有“挂念”“牢记”；“惦记”的反义词另有“忘怀”“忘却”。《新》

［“忘记”の反義語にはさらに“挂念”“牢记”がある。“惦记”の反義語にはさらに“忘怀”“忘却”がある。］

5．反義語指導の効用と問題点について

本章では、前述した調査の結果を踏まえて、反義語指導の効用と問題点について述べる。

5.1　なぜ「反義語」を語彙指導に取り入れるのか

朱志平、冯丽萍（2014：117）においては、学習者の語彙学習ストラテジーとして数多くの項目が挙げられているが、そのうちの一つに“近义词、反义词联系学习策略”がある。また「反義語」は語彙論における一つの事項であるが、「形態素」、「同音語」、「上下位語」、「特殊語彙」、「単純語と複合語」などと比較すると、学習者の「反義語」という概念に対する理解度や認知度は高いものと言える。したがって、「反義語とは何か」という語彙論の体系知識としての基礎的な指導がなされていない状況でも、比較的容易に語彙指導の中に含めることができると言える。語彙指導における語義面では「反義語」の他、「類義語」の重要性がよく唱えられる。しかし、「類義語」については、とりわけ学習者の入門や初級の段階から、過度に語彙指導の中に取り入れてしまうと、その弁別の複雑さにより、学習者の負担が増すことになり兼ねない[23)]。類義語指導は、ある意味では、すでにある程度の学習を経て、一定の語彙量を持っている初中級から中級以上の学習者に対して、徹底かつ体系的に行なう。特にアウトプットの面で、より正確に語を使用するための強化に用いることが指導面での目的であると言える。一方、「反義語」は「類義語」と異なり、語の導入時点、つまりある語の初出の段階で提示することが可能であると考えられる。学習者の語彙学習における重要な一つのストラテジーと捉え、学習者のレベルを問わず語彙指導の一環として、初級の段階から多くの反義語を取り入れる指導法が確立できる。とりわけ、両極性を具える程度を示す形容詞や依存関係にある“买”と“卖”、“进口”と“出口”などの反義語については、それぞれ個別に学習するよりも、セットで学習した方が効率的である。学習者により多くの反義語をインプットさせることは、学習者の語彙学習全体に対する負担を軽減し、また学習後の語彙の定着度をより高めるといった指導目的を果たすことにつながると言える。

5.2　語の多義性や類義関係を利用した反義語の指導

张志毅、张庆云（2008：18）では、“依据义位划分反义词群”という一つの反義語分析の方法が述べられている。“正”という語に関して、例えば、“垂直或符合标准方向”に対しては“歪”、

“位置在中间”に対しては“側、偏”、“正面”に対しては“反”などというように、合計７つの意味項目に対して、それぞれの反義語を定める図式が示されている。

また、一つの語に対して、その語の内部の意味範囲に拠り、複数の反義語を定める方法も示される。“稳定”という一つの語に関して、以下のようにその意味に関する使用域に基づいて、それぞれの反義語を定める方法である。

“用于局势方面，跟“动荡”是反义词”
“用于人心方面，跟“浮动”是反义词”
“用于物价方面，跟“波动”是反义词”

张志毅、张庆云（2008：8）

反義語と言えば、通常は「１語対１語」の関係性で示されるが、このように「１対複数」という方法で、反義語を設定し、教育の場に取り入れることに有用性が認められる。

4.1 でも述べたが、実際、反義語辞典においても、このような方法で見出し語を提示する辞典が見られる。例えば、《新》では“紧张”に対して、三つの反義語が定められている。“多用在精神、情绪等的张弛方面”という意味項目に対しては“松弛”、“多用在事态、局势、气氛的松紧方面”に対しては“缓和”、“多用在经济开支、生活条件等方面”に対しては“宽裕”という「１対複数」の語義のネットワークの面での構図で、反義語が示されている。このような反義語の関係を用いることにより、下図（表８）のように反義性だけではなく、多義性や類義性などを含め、一つの語に対する語義の複雑性、所謂「語彙の深さ」の面での理解を促すことができる。

（表８）

A^1 ⇔ B	「A」と「B」、「C」、「D」→「反義関係」
A^2 ⇔ C	「B」と「C」と「D」→「類義関係」
A^3 ⇔ D	「A^1」と「A^2」と「A^3」→「多義性」

複数の反義語を挙げる場合は、その対象となる語の意味項目や使用域に分けた上で、それぞれに対する反義語が示される。“紧张”の例を挙げて言うと、“松弛”、“缓和”、“宽裕”といった複数の反義語があること以外に、上で述べた“紧张”に対する“多用在精神、情绪等的张弛方面”などというように、一つの語の語義には、多義性があり、また語用論的な使用域等の付属義も含めて学習者に認識させることが可能である。さらに、反義語として示された複数の語の関係

を見ると、その間には「類義性」があることが多く、それらを「類義語」として、学習者に理解させることも可能である。

5.3　反義語に関わる「付属義」の問題について

反義語辞典では、見出し語についての文法面、意味面、語用面における「付属義」と見なせるいくつかの事項が表記されることは 4.2.5 で述べた。ただ、反義語「A ⇔ B」に対して、「A は賓語を取れる、B は賓語を取れない」、「A は書面語、B は口語的」などというように異なる性質をもつ場合、その付属義として表記することは、とりわけ教育面では検討の余地があると筆者は考える。反義語や語義の反義関係を利用した上で、学習者の語彙学習の効率を高めるためには、反義語として挙げられる二つの間の対立性はその語彙的な意味での反義性に限定される方がよい。付属義を示すのであれば、「A、B はともに賓語を取れる」、「A、B はともに書面語である」といったように、共通性がある方が反義語自体に対する学習がなされやすい[24]。総じて言えば、反義語辞典等で付属義を示す場合は、その共通性を重要視し、優先的に付記するという点を主張したい。

A 分明 ⇔ B 模糊：　A 有副词用法　B 有动词用法《应》
A 辩护 ⇔ B 批驳：　A 一般不能带宾语　B 常须带宾语《现》
A 持续 ⇔ B 间断：　A 多用于肯定句　B 多在否定句里使用《现》
A 平常 ⇔ B 特殊：　A 可以重叠　B 不能重叠《现》
A 不齿 ⇔ B 尊敬：　A 用于书面语　B 多用于口语《应》

上に示すのは、ある反義語辞典において、その釈義の箇所に見出し語の付属義が示される例である（A、B の符号は筆者による）。各反義語の右側に示される付属義は、見て分かるように共通したものではなく、異なるものや対立性を帯びるものである。一つ目の例は、ともに形容詞であるが、“分明”は「副詞」、“模糊”は「動詞」の用法があるとされている。語自体の情報として、このような用法上の特徴をもつということは非常に重要な点である。ただ、反義語辞典においては、一組の反義語に対して、全く異なる付属義に関する内容を示す必要性は低い。以下の例についても、「賓語」、「文のタイプ」、「重ね形」、「文体」等の面での内容が示されるが、いずれも異なる内容や対立性を帯びるものである。

この観点から述べれば、一つ目の“分明⇔模糊”については、同じ形容詞であり、さらに動詞の用法も持つ“清楚”と組み合わせ、“清楚⇔模糊”を反義語として見なす方が良いと考えられる。二つ目の“辩护⇔批驳”は“辩护”を“拥护”に取り換えることにより、ともに賓語を伴えるという共通性が認められることになる。“持续⇔间断”は“间断”を“中断”や“停止”

に取り換えることにより、付属義の相違は解消できる。次の例も同様に、それぞれ“寻常⇔特殊”“忽视⇔尊敬”という一組の反義語にすると、「重ね形」、「文体」という面での共通性を帯びることになる。このように「付属義」の共通性は、語彙指導の面でどの語とどの語を反義語とするのかという、反義語の選定の面における一つの指標として応用できる。

5.4　反義語辞典で示される“褒贬义”について

語義についての「よい」と「わるい」、所謂“褒贬义”「褒貶義」による対立性から、それらの語が「反義語」と認識される例が多い。反義語辞典においても、以下のように、この“褒贬义”が示されることが多い。

“调皮⇔听话”［调皮］形容词。贬义。顽皮，不听话，不驯服，不易对付。
［听话］形容词。褒义。听从师长或领导的话，驯服，易对付。《应》

反義語辞典においては、このような“A ⇔ B、A 贬义、B 褒义”といった記載がよく見られる[25]。“褒贬义”は、語彙学習の語義についての理解の面で、付属義に関する重要な要素の一つであることは相違ない。しかし、“调皮⇔听话”のような反義語辞典における表記については、その多くが語の基本義のレベルで「よい」「わるい」が認識できるものであり、あえて反義語辞典の釈義の箇所で明記する必要性は低いと言える。

「褒貶義」が反義語の釈義において有用性があると考えられるのは、「“丰满↔“干瘪”（贬义）、“丰满”↔“苗条”（褒义）」のようなケースである。語の基本義のレベルでの「太い」や「細い」という意味に拠れば、“干瘪”や“苗条”などの反義語が定められる。“丰满”は比較的幅広く用いられる語で、その付属義として、「褒義」と「貶義」のどちらも兼ね備えていると見なせる。上に示すように、「褒義」の意味では“苗条”と、「貶義」の意味では“干瘪”と反義関係がある。このように、一方の語の意味範囲が広く、「褒貶義」のどちらも持つ場合、その反義語を「褒義」と「貶義」に分けて示す方法が効果的であると言える。

5.5　日本語の漢語語彙における反義語との関係

中国語の反義語辞典で示される反義語を日本語語彙における反義語との関係性により整理すると、おおよそ以下のように分類ができる[26]。

（ここでは、中国語の反義語を“A ⇔ B”、意味的に相当する日本語の反義語を「ア⇔イ」[27]で示す）

① “A”と「ア」が同形、“B”と「イ」が同形

例：“肯定⇔否定”《新》「肯定⇔否定」、“具体⇔抽象《新》「具体⇔抽象」

“必然⇔偶然”《现》「必然⇔偶然」 “理性⇔感性”《新》「理性⇔感性」

“浅⇔深”《应》「浅い⇔深い」

② “A”と「ア」が同形、“B”と「イ」が異形

例：“出发⇔到达”《新》「出発⇔到着」、“购买⇔销售”《现》「購買⇔販売」

“勇敢⇔胆怯”《现》「勇敢⇔臆病」、“优良⇔低劣”《现》「優良⇔劣悪」

“回答⇔提问”《现》「回答⇔質問」

“脱⇔穿”《应》「脱ぐ⇔着る」、“笑⇔哭”「笑う⇔泣く」《应》、

“高”⇔“矮”《教》「(背が) 高い⇔(背が) 低い」

③ “A”と「ア」が異形、“B”と「イ」が異形

例：“粗壮⇔瘦弱”《应》「頑丈⇔華奢」、“动荡⇔稳定”《新》「動揺⇔安定」、

“发放⇔领取”《新》「差出⇔受取」、“便宜⇔昂贵”《新》「安い⇔高い」

“热闹⇔冷清”《新》「賑わう⇔寂れる」、“拉⇔推”《应》「引く⇔押す」、

“偶尔⇔经常”《新》「たまに⇔いつも」 “未曾⇔已经”《新》「いまだに⇔すでに」

日本語話者の学習者にとっては、上で示した①が最も学習しやすい。日本語の漢語語彙とほぼ同形同義の関係にあることから、学習後の定着度の面についても、おおよそ問題は生じないと見なせる。最も重要なのは、次の②のタイプであると言える。一方が日本語と同形であることにより、とくに同形の語を先に学習した場合、母語による負の干渉が働くことが考えられる。例えば、“出发”を学習した学習者は日本語語彙の干渉を受けて、その反義語の「到着」するという意味の中国語として、“＊到着”という語形が存在するという誤った理解をする可能性がある。“出发”を学習すると同時に、その反義語にあたる“到达”も学習することで、このような負の干渉を防ぐことができる。また“回答⇔提问”と「回答⇔質問」の例のようなケースでは、とくに注意が必要となる。学習者が“回答”の反義語として、日本語語彙の干渉を受けて“质问”を想定すると、日中同形異（近）義語の問題が生ずることになり、“质问”という中国語の語に対する正しい理解を得るのが難しくなる。以上のような理由から、②のタイプの反義語のように、一方の語だけが日本語の語と同形になる場合は、学習者にとって初出の時点で、その語と反義関係にある語をセットで学習するような方法が求められる。③のタイプは日本語の語形には無い語や、或いは存在したとしてもほとんど使用されない語形が反義語となるタイプである。これらの語については、日本語語彙からの干渉はないが、その語自体に関

する語形や語義をすべてゼロの状態から学習する必要が生ずる。したがって、語自体のレベルにもよるが、難易度が高い語の場合は、初出のときに、反義語とセットで学習するよりも、まず個別に一つ一つの語を学習した後に、反義語として提示する方法も含めて考える必要がある。また、上の例を用いて言えば、“热闹”を学習し、さらに後に“冷清”を学習するときに、“冷清”の反義語として、既習の“热闹”を挙げる。つまり一組の反義語の二つ目を学習した際に、もう一方の学習済みの方を取り上げるという手順である。③のタイプの反義語はこのように語彙学習や指導の面で、段階を踏んで、その導入を検討する必要が認められる。

また、これらの日本語の語彙との関係性は、教育面での反義語の選定の際にも応用できる。「A ⇔ B」と「A ⇔ C」のどちらを反義語として取り上げるのか。具体的に言えば、どちらを反義語辞典の見出し語として提示するのか。またテキストにおいても、「A」の反義語として語注等の箇所で示す場合、「B」と「C」のどちらを選定するのかという問題である。日本語話者の学習者に限定される事項であるが、「A ⇔ B」が上述した①のタイプ、「A ⇔ C」が②のタイプである場合は、教育的な効果を考慮に入れれば、あえて「A ⇔ C」の方を取り上げる方が適格である。

5.6　その他

ここでは、反義語指導の効用と問題点について、上で述べた5点以外に指摘できる点をいくつか述べる。

① 反義語辞典においては、「“干部⇔群众”“干部”的反义词另有“工人”；“群众”的反义词另有“党员”《新》、“君子⇔小人”《新》、“天时⇔地利”《应》」など中国の社会や文化が色濃く反映されるものがある。このような反義語の数は多くないが、これらを学習することにより、語彙的な反義性の理解とともに、語の社会や文化的な意味に対する理解にもつながる。そのため語彙指導において優先的に取り上げる意義があると見なせる。また成語に関する反義語についても、中国の文化や歴史的な背景とともに理解することが必須となるため同様の効果が認められる。

② 4.2.5でも述べたが、一つの文や文章の中で、一組の反義語がともに使用されている例を何らかの形で提示する方法がある。これは、語彙レベルに加えて、文意等のレベルからもその反義性を認識させることがねらいとなる。また別の角度から言うと、その文中の反義語を理解することにより、文章全体の読解につながることもあるため、読解力の向上に対しても有用性があると考えられる。また、どの語とどの語を反義語とするのかという選定の問題に際しても、一つの文において共起する比率が高い場合の例を優先的に取り上げる。つまり、言語事実に基づき、一つの文において共起する比率が高い方を選ぶという方法を用いることが可能である。

③ 「A ⇔ B」の反義関係が成立する状況で、二音節語としての「AC」は存在するが、一方で「BC」が成立しない場合は、「過度の類推」が作用する可能性が高いため、指導上注意が必要となる。例えば、“热”と“冷”について、二音節語の形態素として“热”が使われている単語に対して、同様に“冷”についてもその反義性を示す語として存在するという誤解がなされやすい。“热门”、“热战”、“热饮”から、それぞれ“冷门”、“冷战”、“冷饮”という正しい類推が作用する場合は問題ない。しかし一方で、“热情”、“热卖”、“热乎乎”という語に対して、意味的に反対の語として、それぞれ“＊冷情”、“＊冷卖”、“＊冷乎乎”といった存在しない語を類推してしまう可能性はある。また「冷房」という意味の“冷气”から、「暖房」という意味の語として“热气”を類推しまうといった現象も考えられる。

④ 語構成において反義性をもつ語を利用して、単語レベルでの反義性や反義語についての学習者の意識を高めることができる。例えば、“开关”、“买卖”、“先后”、“得失”、“呼吸”、“早晚”などは並列型の内部の語構成をもつ語であるが、二つの形態素の関係には、反義性が認められる。これらの単語におけるそれぞれの形態素は、ほぼ同じ意味で単独で使用される単語レベルにおいても反義語としての関係が成り立つ。このように語構成において反義性を持つ単語を語彙指導の中で活用する方法が考えられる。

６．「反義語」に関する学習事項のテキストへの導入

６.１　授業用テキストへの導入とその意義について

大学で中国語を履修する多くの学習者は全般的に課外の学習に対しては関心が薄い。一方で、テキストに明示されている事項や内容は意欲的に学習し、獲得しようとする姿勢が見られる。つまり、ほとんどの大学生の中国語学習者は、授業の内外を問わず、授業用テキストを中心に学習している状況が顕著である。このような学習者のテキストへの依存度に照らし合わせると、一般辞書や反義語辞典のみならず、学習者が日常的に用いる授業用テキストに「反義語」を取り入れ、学習者に語彙学習の過程で、その重要性に対する認識を強化させる必要がある。

２章で述べたように、日本で使用されている中国語のテキストの中には、語注の中で、新出語句の反義語を示すものが若干見られる。反義語をテキストに取り入れるには、新出語句として提示された語に対して、反義語を付す方法が一般的である。現存のテキストで、このように反義語を付すものはいくつか見られた。しかしながら、全テキストにおける語注の箇所で提示される語の中で、その反義語が示される比率は極めて低い。反義語を本格的にテキストに取り入れる場合は、テキストのレベルにもよるが、形容詞や動詞を中心に語注の箇所で示す三分の一くらいの語に対して、その反義語を付す方法が考えられる。その他、テキストの本文において一組の反義語が同時に使用されている文を提示するといった工夫もできる。

さらに、所謂「語彙論体系知識」としての反義語に関する事項を学習者に明示的学習項目と

して、テキストの中に表記することが可能である。学習者の効率的な語彙学習を促進させるために作用する明示的知識を獲得させるのが指導上のねらいとなる。現在主に大学で使用されている一般的なテキストは、一課分の構成要素がおおよそ「本文」、「語注（新出単語）」、「学習ポイント」、「練習問題」に分けられると言える。学習者が明示的学習を通して知識を獲得することが目的である場合は、その中の「学習ポイント」の箇所にその学習事項を盛り込むのが適当である。既存の日本で使用されている中国語テキストでは、この「学習ポイント」の箇所には「量詞」や「助動詞」などの実詞、「前置詞」などの虚詞、また「補語」などの文成分や「接続詞の呼応表現」など、主に文法の範疇に属する事項が示されるのが一般的である。反義語に関する学習事項は「反義語のタイプ」、「反義語における形態素」、「反義語に関する修辞技法」、「反義語と対義語」、「反義語と類義語」、「反義語の語形」などが考えられる。これらを「学習ポイント」の箇所に取り入れることにより、「反義語」についてのより幅広い理解が得られることが想定できる。

6.2　反義語に関する練習問題

テキストでは、各課の最後に練習問題が付されるのが普通である。一般的に、その課で学習した発音や単語、語句、文法項目を復習するための問題で、形式は主に空欄補充や語順の並べ替え、ピンイン表記、日本語訳や作文などである。筆者の観察では、既存のテキストでは、練習問題の内容について、「反義語」など所謂「語彙論」に関する事項を問うような問題はほとんど使用されていない[28)]。学習者の語彙学習を重視するテキストを作成することを思料するなら、各課の「練習問題」について「反義語」に関する問題を多く取り入れることが一つの方法として挙げられる。

反義語に関しては、以下のようなタイプの練習問題が使用できる[29)]。

① 次の語の反義語を選択肢の中から選びなさい。

“热闹” ― A 寒冷　B 冷清　C 谨慎　（答：B）

“高雅” ― A 低调　B 通俗　C 骄傲　（答：B）

② 次の文中における下線が引かれた語句と意味が反対のものを選びなさい。

・为什么他们越来越不<u>快乐</u>呢？　A 高兴　B 烦恼　C 紧张　（答：B）

・我爱人房间布置得不<u>讲究</u>。　A 朴素　B 喜欢　C 随便　（答：C）

上の①のタイプは直接、相当する反義語を問う問題である。テキスト内で用いる場合、選択肢に挙げる語はなるべく既出であることが問題作成の条件となる。②は否定形との意味関

係と文意を利用して、学習者に考えさせるタイプの反義語に関する練習問題である。下線部の語がテキストの前の部分で既出であり、また選択肢に挙げる語も学習者は学習済みである方が望ましい。

7. おわりに

张旺熹（2013）では中国語教育に従事する教師の基本的な課題として、“教什么”「何を教えるのか？」、“怎么学”「どう学ぶのか？」、“怎么教”「どう教えるのか？」という三つを挙げている[30)]。ここ数年は、教師側の関心事項として、後者の二つが注目され、さらに“为什么学”「何のために学ぶのか」という教育上の学習目的の設定についての研究も盛んである。この中の“教什么”「何を教えるのか」という課題については、教育の様々な場における指導内容を指すものと解釈できる。指導する立場にある教師にとっては指導内容を検討した上で、教育の場で実践していくことは、まさに最重要課題であると言える。近年は教育に関するいくつかのガイドライン等が公布、発表されている。そのため、音声、文法、語彙といった言語的要素に関する指導内容に関しては、すでにある程度完成の域に至っていると認識されている傾向にある。

しかし、「何を教えるのか」という課題に対して、大学での外国語教育においては依然として議論と検討が必要であると思われる。とりわけ音声、文法、語彙の各領域における体系的な事実としての言語知識を指導内容の一つとして、より充実させる必要があると筆者は考える。その中でも特に語彙の領域についての体系知識の教授は文法や音声と比べると薄弱である。中国語教育学会作成の『中国語初級段階学習指導ガイドライン』においては「語構成」や「形態素」といった語彙論に関する一部の事項が示される。ただ、これらがテキストに示され、授業内容に組み込まれることは稀であるというのが現状である。

本稿で取り上げた「反義語」も、語彙論体系知識の一つの事項であるが、本稿における考察の結果を参照し、実際に、教育現場において、より多くの反義語を効果的に導入する可能性をさらに見出したい。学習者の語彙学習において、反義語が一つの学習内容として定着し、また学習者の学習ストラテジーとして確立するために、今後さらに反義語に関する考察を続け、効果的な指導方法を探りたい。

注

1）「ピンイン」とはアルファベットによる現代中国語の発音表記のことである。

2）「語彙の深さ（広さ）」については、主に門田、池村（2006：223-225）を参照した。

3）「語彙学習ストラテジー」については主に朱志平、冯丽萍（2014：117）を参照した。

4）日本語の表現では「反義語」の他、「反対語」、「反意語」などと称されることがある。中国語では、ほとんどの場合“反义词”と称される。本稿では、一律に「反義語」と称する。

5）反義語研究の総括については、刘国辉（2008）を参照した。

6）中国語の文献の引用に対する日本語訳はすべて筆者によるものである。また、日本語訳の箇所は、［ ］を用いて表記する。

7）本稿で用いる記号の「＊」は、文やフレーズ、単語が誤りであることを示すものである。

8）主に中華人民共和国の大学等で使用されている外国人留学生向けの中国語学習者用のテキストである。日本で出版されているテキストとの最大の違いは、専ら日本語話者の学習者向けに作成されているわけではないことである。

9）主に中国語教育面での「語彙論体系知識」に関する概説書としては、万艺玲（2010）《汉语词汇教学》、胡培安、王飞华（2014）《实用对外汉语词汇-海外华文教育教材》などが挙げられる。また学習者向けの学習書としては、万艺玲（2000）《汉语词汇教程（三年級）-对外汉语本科系列教材》がある。

10）浅野（2013a）を参照。

11）その他、以下の三部の反義語辞典を参照した。张志毅、张庆云（2008）《新华反义词词典（中型本）》商务印书馆、朱景松主编（2014）《现代汉语反义词词典》语文出版社、贺国伟主编（2009）《现代汉语反义词典》上海辞书出版社。

12）《汉语教与学词典》については、見出し語の意味項目に対する釈義において、（跟“～”相对）という形式で反義語が示されていた例をカウントした。数字には、単語の他、形態素とされる例も含まれている。また、例えば“男”の箇所で（跟“女”相对）、“女”の箇所で（跟“男”相对）というように、重複する例も見られたが、このような場合は、二例をまとめて一例としてカウントした。

13）例えば一組の見出し語が３語ある場合も、それらがすべて二音節語である場合は、「2-2」の中にカウントした。

14）本稿では、反義語辞典で見出し語とされていた用例を「⇔」の記号を用いて提示する。

15）成語は除外した。一組の反義語の品詞が異なる場合はそれぞれをカウントした。また、反義語とされる語に対し、複数の品詞が表記されている場合についてもそれぞれをカウントした。《教》については、形態素の品詞性が示されている場合も含めた。つまり例えば、“动素”は「動詞」としてカウントした。

16）中国語の品詞は「実詞」と「虚詞」に分けて論ずることが多い。「虚詞」は前置詞や接続詞、助詞など主に文法機能を果たす類の品詞を指す。

17）“奢侈”は見出し語としては提示されていないが、“节省、节俭、节约”や“简朴”の補足的な反義語として挙げられている。

18）《现代汉语反义词典》では、語と語の間における反義性から見出し語として一組の反義語を提示する体裁ではなく、一つの語について想定できる反義語を「一対複数」の形で示されている点、他の辞典と異なる。

19）李禄兴主编（2014）《新 HSK5000 词分级词典》北京语言大学出版社を参照した

20）本稿の 1 章で示したように、刘叔新、周荐（2000）に拠れば、反義語としての成立条件の一つに品詞の同一性がある。ただ、张志毅、张庆云（2008：10）には、“在少数的不同词类的反义词中，首先较为多见的是由形容词和动词构成的。如：平稳（形）↔摇摆（动），真实（形）↔虚构（动），陌生（形）↔熟悉（动），俭省（形）↔浪费（动），兴盛（形）↔衰落（动）。其次见到的是形容词跟名词或副词构成的。如：长远（形）↔眼前（名），永久（形）↔暂时（名）。再次，也见到了由介词和动词构成的。如：自（介）↔至（动）。”という記載があり、一部異なる品詞の語が反義語となり得ることが認められている。また反義語辞典の中では、贺国伟 2009《现代汉语反义词典》のように品詞が一切表記されないものもある。

21）本稿では、語の語彙的な意味や辞書における意味項目で示される語義を除いた、文法、意味、語用面での、あらゆる語彙情報を「付属義」と称する。

22）《反义词应用词典》では、見出し語として示される反義語の約半数にこのような用例文が提示されている。

23）この点は、実詞と虚詞の状況が異なる。虚詞については、初級の段階から類義語の問題が取り入れられることが多いと言える。

24）刘叔新・周荐（2000：99～104）を参照。

25）《反义词应用词典》では見出し語、計1047組の反義語のうち、151組の反義語に対して、この“褒贬义”が示されていた。

26）日本語の語彙との関係については、さらに「同形異義語」や「同形近義語」の存在があるが、ここでは単に「同形語」と「異形語」という関係性に限定して、まとめた。

27）日本語語彙の反義語の例については、すべて『活用自在反対語対照語辞典』を参照した。

28）浅野（2013b）を参照。

29）以下に示す中国語の文は筆者による作例でインフォーマントによるチェックを受けている。

30）张旺熹（2013：11）を参照。

主要参考文献

浅野雅樹 2013a.「中国語語彙教育の課題と語彙を中心とした中級テキスト作成について」、『藝文研究』第105号：166-187頁

浅野雅樹 2013b.「中国語中級テキストにおける練習問題についての調査と考察―語彙学習に関する問題作成の試み―」、『下関市立大学論集』56巻３号：９-22頁

門田修平、池村大一郎 2006.『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店

洪潔清、劉郷英 2004.『听听说说』白帝社

反対語対照語辞典編纂委員会 2014.『活用自在反対語対照語辞典』柏書房

贺国伟主编 2009.《现代汉语反义词典》上海辞书出版社

胡培安、王飞华 2014.《实用对外汉语词汇-海外华文教育教材》语文出版社

李禄兴主编 2014.《新 HSK5000 词分级词典》北京语言大学出版社

刘国辉 2008.〈三十年来反义词现象研究思考及非对称性反义词表征考察〉《外语研究》第３期：１-８页

刘叔新、周荐 2000.《同义词语和反义词语》商务印书馆

孟凯 2009.〈留学生反义属性词的类推及其成因〉《汉语学习》第 1 期：89-96页

阮咏梅主编 2012.《新中国风－对外汉语中高级阅读教程》北京大学出版社

施光亨、王绍新主编 2011.《汉语教与学词典》商务印书馆

徐安崇主编 2010.《反义词应用词典》语文出版社

万艺玲 2000.《汉语词汇教程（三年級)-对外汉语本科系列教材》北京语言大学出版社

万艺玲 2010.《汉语词汇教学》北京语言大学出版社

袁晖主编 2008.《新华反义词词典》商务印书馆

袁嘉 2004.〈现代汉语词汇词义不对称与对外汉语教学〉《西南民族大学学报（人文社科版)》第８期：440-444页

张博 2007.〈反义类比构词中的语义不对应及其成因〉《语言教学与研究》第 1 期：43-51页

张旺熹 2013.《对外汉语本体教学概论》商务印书馆

张宜生 2013.《现代汉语》中国人民出版社

张志毅、张庆云 2008.《新华反义词词典（中型本)》商务印书馆

朱景松主编 2014.《现代汉语反义词词典》语文出版社

朱志平、冯丽萍主编 2014.《汉语作为第二语言习得研究－汉语国际传播基础理论与实践研究丛书》北京师范大学出版社

朱子仪主编 2008.《捷径 中级速成汉语课本（上册)》北京语言大学出版社

用例出典

《新》: 袁晖主编 2008.《新华反义词词典》商务印书馆

《应》: 徐安崇主编 2010.《反义词应用词典》语文出版社

《现》: 朱景松主编 2014.《现代汉语反义词词典》语文出版社

《中》: 张志毅、张庆云 2008.《新华反义词词典（中型本)》商务印书馆

《上》: 贺国伟主编 2009.《现代汉语反义词典》上海辞书出版社

「付記」本稿は平成27年度科学研究費補助金（基盤研究 C 課題番号「15K02693」）における研究成果の一部である。